

# 「第一の創業」では、子どもたちの睡眠環境改善に尽力

明神館脳神経外科 (広島県福山市)

## 大田 浩右

おおた・こうすけ ● 1938年11月7日生まれ。64年、岡山大学医学部卒。同大学医学部大学院卒業後、チューリッヒで顕微鏡手術を学び、76年12月に大田病院(現・医療法人祥和会脳神経センター大田記念病院)を開設。2006年1月に同院理事長を退き、同年9月に明神館脳神経外科を開業。福山通運渋谷長寿健康財団理事長



山陽自動車道・福山東インター近く、国道2号にアクセスする幹線道路沿いの立地条件に恵まれた場所に位置する「明神館脳神経外科」。

大田浩右院長は1976年に大田病院(現・医療法人祥和会脳神経センター大田記念病院)を開設。顕微鏡を導入した脳神経外科手術の第一人者としてその名を知られている。昨年、医療法人祥和会の理事長を退き、クリニックを立ち上げた。その特徴は、脳神経外科治療のほか、豊富な脳卒中診療の経験から「睡眠障害治療」にアプローチするという新たな取り組みだ。3階のフロアすべてを使った「睡眠

クリニク 睡眠障害と向き合える 静ひつな雰囲気



↑最新の4階建ての建物は幹線道路沿いで視認性も高い。1階には通所リハビリの利用者やスタッフのためのレストラウンがある。2階は脳神経外科外来で3階が睡眠研究所、4階は通所リハビリ施設になっている。



↑睡眠環境指導室に備えられたベッドはリクライニング式。テレビを観ながらリラックスし、脈拍や体動を感知する内蔵センサーで眠気を感知すると自動的にフラットになる仕組み

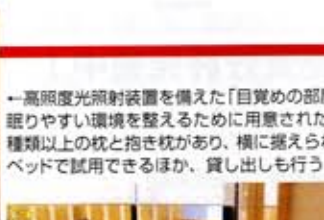


↑エレベーターを降りると、ロールに飾られた大きな木彫りの仏像がすぐに目に飛び込んでくる。このほかにもエスニックな小物がたくさん飾られ、ヒーリングサロンの趣が漂う



↑4階の通所リハビリテーション施設「アヤル」。筋力増加と脳リハビリを特色とし、過負荷がかからず筋肉への負担をゼロからスタートできる電動式トレーニングマシン「モタサイズ」が5機導入されている

↑不登校や引きこもりなど、睡眠環境の悪化が原因と思われる子どものカウンセリングを行う個室。成人用のカウンセリングルームがさらにもう1室ある



↑高照度光照射装置を備えた「目覚めの部屋」。眠りやすい環境を整えるために用意された20種類以上の枕と抱き枕があり、横に据えられたベッドで試用できるほか、貸し出しも行う



↑検査室から送られてくるデータを解析する「脳波・睡眠ポリグラフ室」。専任の臨床検査技師など4~5人が常に睡眠や呼吸の状態をチャックする



↑電子カルテに添付する写真の撮影機

↑電子カルテに添付する写真の撮影機



「研究所」は、天然木のフローリングを使用した落ち着いた空間。仏像をはじめとするエスニックな装飾品が並び、その趣はクリニックというよりヒーリングサロンのようでもある。最新のPSG(終夜睡眠ポリグラフ検査)が揃えられた検査室3室のほか、「眠りの部屋」と名づけた睡眠環境指導室が2室、カウンセリング室2室、高照度光療法室やC・P・A・P(持続陽圧呼吸療法)による治療室など充実した設備を誇る。

「インターに近いこの場所を選んだのは、県外を含む遠方からの来院を容易にするため。地域はもちろん、睡眠に本格的に取り組む病院は全国的にもまだ少ない。健康に生きる基本は「食べる、歩く、眠る」です。これからは睡眠の重要性に注目が集まる時代になるはず。少しでも多くの方にそれを知ってもらいたいという思いがあったので、交通の利便性は不可欠でした」

特に力を入れているのが子どもたちの睡眠環境の改善だ。不登校、引きこもり、そしてすぐに「切れる」、あるいはコミュニケーション障害など、子どもたちの心と身体に起こる異変の1因は「睡眠環境の悪化」にあるとみている。



↑重さ約30グラムの軽量・小型のアクティグラフ。睡眠リズムの乱れや無呼吸睡眠症の診断に用いるほか、睡眠日記の補助的な役割としても活用されている

「高齢社会と言われるが、長寿は子ども頃からの健康があつてこそそのもの。医師として、子どもたちがよく口にす「ムカツク」「疲れる」「切れる」などに耳を傾けずには、本当の意味での長寿社会への貢献などできません」と熱く語る。一方で、クリニックの設立には自身がSAS(睡眠時無呼吸症候群)で苦しんだ経験が動機にもなっている。

「まだC・P・A・Pも一般的ではなかった時代で、本当に苦しかった。そんななか、試行錯誤で体位を工夫すれば、どうにか日常生活に困らない程度にまで改善することができた。そのときに得た経験を活かしたいという思いもあり、定年が近づくと頃には睡眠をライフワークにしようかと決めていた」と振り返る。

開設にあたり、「猿真似にはしたくなかった」ので、他の施設は一切参考にしなかった」という言葉からは、持ち前のバイオニア精神がうかがえる。

睡眠障害の治療には精神科領域に属するものも少なくないため、精神科医と連携するが、比較的「敷居」が低い同院がスクリーニングの働きをすることで、睡眠障害で悩む患者の治療への意識を高めることも大きな目的だ。さらに耳鼻科、歯科などと連携した睡眠グループの形成も視野に入れ、「睡眠の重要性をアピールし、これからの若い医師、技師に睡眠への興味を持ってもらいたい。睡眠専門のスタッフを育てることが、クリニックと私の役目だと思っています」と抱負を語る。

事業の継続を駅伝にたとえ、「自分の役割が終わったら次のランナーに託す。タスキを渡してしまつたら何もしなほ方がいい。そのかわり、自分に与えられた区間は全力で走らなくては」と語る大田院長。理事長を退き、一度は手放したタスキだが、また新たなタスキを肩に、「第一の創業」と位置づけ走り始めている。

「仕事に興味もないもの。私から仕事を取つたら何も残りませんから、68歳で開業したんですよ」

親しみやすい笑顔を絶やさず、常に一歩先の医療を見つめる目には、熱意がみなぎる。